

L e o (レオ) 氏の事など

常務取締役 樋口 和夫

L e o (レオ) という言葉を聞くと、私達の世代は手塚治氏の名作品である「百獣の王レオ (ライオン)」を思い出す。

ここで紹介するのは江崎玲於奈さん、1973年に半導体におけるトンネル現象を実験的に立証し、同年ノーベル賞を授与された方である。

L e o とは彼がIBMワトソン研究所主任研究員の時つけられた米国時代の愛称である。江崎さんがこの半導体研究を始められた動機は「(既に) 踏みならされた道から外れてみたい」という事で、又、そのきっかけはベル電話研究所を訪問した時にグラハム・ベルの胸像に刻まれていた言葉であった。

それは「時には踏みならされた道から外れ森の中に入りなさい。きっと、あなたが見たこともない、何か新しいものを見出すに違いありません」という銘文であった。江崎さんは研究者に対しては「大学のような高等教育では、2つの知的能力を養わねばなりません。1つは新しい知識を得て、理解し解析をする分別力。もう1つは自分で新しいことを考えつく創造力」と述べています。

私自身、直接研究にたずさわった事はないのですが関与者から見た我社の研究陣は“分別力”は優れているが、それに比して創造力がやや乏しいと感じている次第である。

それは、やはり先程の“森の中に入る”事が不足しているのではないだろうか？ここで言う森とは私流に考えれば①自然への観察(植物、動物、天体など)②幅広い人間との付き合い③幅広い読書(歴史、宗教、医学、文学、音楽など)これらは又、工場の現場にもあてはまるものと考えている。

最後になりますが、アインシュタインの言葉を書かせていただき、巻頭言の終章とします。

- ① 深く探求するほど知らなくてはならないことが見つかる。人間の命が続く限り常にそうだろうと自分は思う。
- ② 大切なのは疑問をもち続けること。
- ③ 神聖な好奇心を失ってはいけない。好奇心はそれ自体に存在理由があります。

